図書館の選書ツールにおける医学専門書の掲載状況について

伊藤民雄（実践女子大学図書館） ito-tamio@jissen.ac.jp

Ⅰ　医学専門書とは

本発表で取り上げる医学専門書とは，医学専門書 30 社加盟の日本医書出版協会（以下，JMPA）によれば，医療従事者や医療系学生向けの専門書を言い，一般読者向けの「一般健康書」や「家庭医学書」と明確に区別される。同書は多品種少部数発行のため高額であり，出版社と同協会認定書店間の直取引，専門取次の存在もあり，一般書流通のように二大取次の寡占状態が生じてない [1]。多くが認定書店でのみ販売されるため，地域によっては気軽に見られない状況が発生する。

Ⅱ　研究の背景と目的

全国の公立図書館で実施されている医療健康情報サービスを見聞した西河内と石井は，2016 年にそのコレクションの特徴を「既存の所蔵資料を生かした家庭医学書などの一般的な図書が多く，医学系の専門書が少ないこと」，即ち「家庭医学書中心の蔵書構成」と指摘した [2]。

松本，池谷，桂は，全国の公立図書館における医学薬学分野に関する図書の選書に影響を与える調査報告の発表を 2017 年に行った [3]。2015 年 8 月から 10 月までの 3 ヶ月間に，国立国会図書館が書誌完了した医学薬学分野の図書 1,313 件を対象に，都道府県立と市区町村立別に図書館所蔵調査を行い，出版社類型での分析により，市区町村立は図書館流通センター（以下，TRC）の『週刊新刊全点案内』の新刊急行ベル対象出版社の図書を多く選書するのに対し，JMPA 刊行図書をほとんど選定していない，という結果を得た。

ベル図書を家庭医学書，JMPA 刊行図書を医学専門書とし，両者の蔵書比率を検討したとすれば，松本らの研究は，西河内らの指摘を数値的に証明したものと言えるが，一つの疑問を持った。仮に公立図書館が利用する選書ツールに医学専門書の掲載漏れが生じているとしたら，本来選ばれるべき医学書を「選定していない」のではなく，「選定できない」とも言え，それが家庭医学書中心の蔵書の一因になっている可能性がある。

そこで本研究は，選書ツールにおける医学専門書の掲載状況，特に網羅性を明らかにすることを目的とする。研究の意義は，選書ツールへの掲載・非掲載が蔵書の性格を決せぬように，多数の非掲載が認められれば，選書ツール版元に猛省を促し，また，非掲載の傾向（例えば，レベル，読者対象，出版社等）が分かれば，図書館員の選書ツールの使い分けに寄与できる，ことである。

Ⅲ　既往文献の調査

医学書の掲載状況を扱った先行研究は認められなかった。唯一 2007 年に，市川と坪井が，「地域図書館が選書に用いるカタログには，医学書（学術書）出版社の書籍が収録されない傾向にある」と指摘した文献 [4]が存在したが，調査方法等が示されず，印象で記述した可能性がある。

出版物全体を取り扱った先行研究として，木下らによる文献がある。2008 年 4 月から 2009 年 2 月までの 11 ヶ月間に発行された図書について，『週刊新刊全点案内』と Amazon データベースを比較して，日本国内の新刊書籍の掲載状況の網羅性を標本調査で検証し，新刊書籍の掲載割合が 60.2%である，という結果を得た [5]。これは，選書ツールが全点と名乗りながら必ずしも全て掲載されるわけではない，ことを示唆する。

一方，研究を進める上で留意が必要になったのは，2015 年の丸善 CHI ホールディングス内の仕入体制再編により，TRC 仕入れ部がグループ会社全体の大学図書館や専門学校などの専門書も含めた書籍全般の仕入に特化した結果，この 1 年で「医学書」分野の売上が飛躍的に伸びた，

という報告 [6]の存在である。この仕入体制変更が掲載状況に影響を与えた可能性は否定できない。

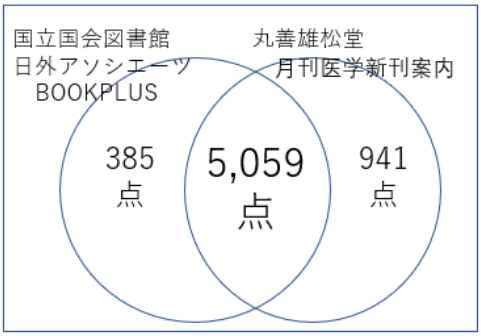
Ⅳ 研究方法

(1)医学専門書の出版点数を確定し分母とし，選書ツール掲載点数を分子として掲載率を算出する。(2)非掲載の傾向（レベル，読者対象，出版社等）を MARC データの項目で分析する。(3)得られた数字の解釈について，関係者の意識を質問紙調査で確認する。

A 医学専門書の出版点数確定

松本らの研究は 2015 年 JMPA 刊行図書の標本調査であったのと，2015 年の CHI グループ仕入体制変更の影響を考慮して，前後 2014 年から 2017 年までの JMPA 刊行図書全点を医学専門書として研究対象とする。

納本図書館である国立国会図書館の JAPAN/MARC の納本漏れを補う日外アソシエーツの BOOK データベースを統合した BOOKPLUS，及び医学図書館向けの丸善雄松堂の『月刊医学新刊案内』（以後，医学新刊案内）の 52 号から 101 号（2014～2018）の新刊データを使い，両者から JMPA 刊行図書のみ抽出し，ISBN で重複排除して統合し，目検で改版なのか，同一版・刷なのかを判断し，結果として 6,385 点の医学専門書を研究対象として得た。うち ISBN なし医学書は 132 点である。BOOKPLUS と『医学新刊案内』の重複は 5,059 点である（第 1 図）。



第 1 図 研究対象の医学専門書の内訳

研究対象として得た JMPA 刊行図書は，公的な出版統計より多くはなっているが，図書として認識される医学専門書は漏れなく抽出できたと考える（第 1 表）。研究対象の発行点数は，2014 年から 2016 年までは毎年 1,700 点前後で推移しているが，2017 年は 1,300 点台に落ち込んでいる。

B 掲載率算出の対象となる選書ツール

TRC の『週刊新刊全点案内』と TRCMARC，及びその比較対照に日外アソシエーツの BOOK データベースとする。これらの選書ツール作成は，取次会社から出版社の新刊見本を借用する形で行われているのが共通である [7] [8]。

TRCMARC は，2016 年 4 月現在，日本の公共図書館 3,241 館のうち 2,801 館（86.4%）が採用している。それを基に選書カタログ『週刊新刊全点案内』が 3,000 部発行される。公共図書館の事実上の標準的な選書ツールである。

一方，BOOK データベースは，本の要旨や目次も含む書誌データベースであり，ネット書店にも利用されている。出版社が取次仕入窓口に持ち込んだ新刊委託見本図書を借用し，作成されるので，掲載率がそのままトーハン，日販の二大取次が扱う医学専門書の新刊委託率と言える。

Ⅴ 調査結果

医学専門書の掲載率は，TRCMARC が 96.5%，『週刊新刊全点案内』が 80.1%であった。一方，比較対照の BOOK データベースは 43.5%とそれ程高くない。両者とも取次から新刊を借用することを考えれば大きな差が出た（第 1 表）。

BOOK データベースは，新刊医学専門書の内容検索に不向きであると言え，同時に二大取次の新刊委託：買切注文は 43.5%：56.5%と判明した。

TRCMARC 非掲載 222 点（うち ISBN なし図書 132 点）は，医歯薬出版刊行 156 点（70%）が占め，ISBN 付き雑誌，雑誌再刊あるいは雑誌別冊である。さらに TRCMARC にあって『週刊新刊

第１表　研究対象とした医学専門書の出版状況，確定した出版点数，及びその掲載状況　（単位：点）

	ツール名	特徴や提供元	2014	2015	2016	2017	合計	掲載率
参考	出版年鑑	出版統計	1,279	1,428	1,339	1,279	5,325	83.4%
	出版指標年報	取次経由の出版統計	1,138	1,349	1,275	1,242	5,004	78.4%
	メテオ・メディカルブックセンター	医学書専門ネット書店	1,258	1,383	1,305	1,244	5,190	81.3%
基礎	BOOKPLUS	NDL+日外アソシエーツ	1,313	1,453	1,370	1,311	5,447	85.3%
データ	月刊医学新刊案内	丸善・医学図書館向け	1,539	1,661	1,565	1,230	5,995	93.9%
統合	研究対象出版点数	上記2点から作成	1,620	1,759	1,660	1,346	6,385	
掲載率	BOOKデータベース	二大取次委託点数	744	811	572	648	2,775	43.5%
対象	TRCMARC	図書館MARCデータ	1,567	1,705	1,604	1,287	6,163	96.5%
	週刊新刊全点案内	TRC新刊カタログ	1,234	1,358	1,301	1,219	5,112	80.1%

［註］『出版年鑑』と『出版指標年報』には，出版点数が少ないため，掲載が省略された出版社がある

全点案内』の非掲載 1,051 点は，5 社 699 点（67%）が占め，その内訳は ISBN 付き雑誌 810 点，及び残り 241 点は元々採録対象外である学生向けの医療資格試験問題集・実習・実技本[7]である。これらを除外すると，図書形態であればほぼ全点（100%）掲載されていることになる。

一方，『週刊新刊全点案内』における暦年別のストック・ブックス，新継続，（書影なしの）単行本・全集の掲載状況は変化に乏しく，書影なし図書も多数（94%）のままのため売上増に繋がる材料が見出せず，仕入体制変更による掲載状況への影響が数字的には全く読み取れなかった。

結論として，「家庭医学書」中心の蔵書となる要因を掲載状況に求めることは困難となった。新たな疑問として，(1)医学専門書全点掲載を図書館員が認識しているのか，(2)TRC の医学書の売上が伸びた事情は何か，以上 2 点を関係者に電子メールで質問紙調査を行うことにした。

Ⅵ　関係者への質問紙調査

A　図書館員への質問

医療健康情報サービス担当を含む 6 人の図書館員（内訳は，医学健康情報サービス担当の都道府県立図書館レベル 3 人(A,B,C)，医学情報サービス研究大会で発表実績のある区市町村立図書館勤務 1 組 3 人(D)，及び比較対照として区市町村立図書館で選書経験のある館長経験者 1 名(E)，中堅職員 1 人(F)，の合計 6 人）を対象に，Q1 の回答後に，Q2 と Q3 の質問提示・回答を依頼する二段階で質問を 7～8 月に行った。

図書館員への質問項目
Q1. JMPA会員社30社を対象に1年間で発行する図書が『週刊新刊全点案内』にどの程度掲載されるかのパーセンテージを、感覚的なもので結構ですのでご回答ください。
Q2. 実際に選書していて、ほぼ100%の掲載率に関する率直な感想をお願いします。
Q3. 医療・健康情報サービスを行おうとした場合、選書ツールに望むことはありますか？

1　経験上感じる掲載率について（事前質問）

実際の JMPA 刊行点数を知らせず，経験上感じている選書ツール掲載率を求めた結果，担当者である A「ほぼ全点」，B「6 割，先輩からは 7 割と聞いた」，C「20～30%」（C のみトーハンのツール），D「雑誌を除いた 9 割」と，非担当者の E「70～75%」，F「医学書の専門部分は普段は素通り。80%」，と回答がなされた。

2　実際の掲載率について（事後質問）

実際の掲載率を伝え，率直な感想を聞いたところ，A「概ねチェックできているが，メジャーではないところに漏れあり」，B「意外。全点案内は全点でない経験からの思い込み。専門医向き図書ま

で載せる必要ありか」，C「驚いた」，D「ほとんどの新刊医学書が掲載されておりツールは便利」，E「専門書に手が出ないため，一部しか選書していない。司書の予備知識が乏しい」，F「掲載率は高いと思ったが，全点掲載のように感じていない」と回答がなされた。

3 選書ツールに望む改善点（事後質問）

A「ガイドライン改訂情報，難易度と記述のレベル。しかし，どこまで入れるかを定めるのが難しい」，B「対象の医療従事者を医師と医療スタッフに分けて欲しい。件名が複数欲しい」，C「新聞や医学関係雑誌の書評紹介図書リスト」，D「表紙画像は全点（筆者註：掲載医学書の大半は書影がない）。全点掲載されているならば司書の選書スキルが試される」，E 回答なし，F「医学分野の一般書と専門書の混在。分けるべき」，であった。

4 考察

正確な出版点数を伝えずに感覚的な掲載率を求めたこともあり，担当・非担当関係なく回答の数字の幅が大きかった。しかし，A や D のように既に実際の掲載率を認識し，自信を持って正確な数字を断言する医療健康情報サービス担当者も存在することが分かった。掲載率を実感しにくいのは，選書が「週刊」のツールに合わせ週単位で行われるため，年単位の全体像が把握しにくいからであろうか。D の「全点掲載ならば選書スキルが試される」という意見は，もっともな指摘で，寄せられた選書ツールの不足する点，改善すべき問題が解消・解決された時に，改めて医学書専門書を「選定していない」のか否か問われるのだろう。

B 図書館流通センターへの質問

「医学書分野の売上が飛躍的に伸びた」という事情は何かという質問に対して，TRC 仕入担当者から，「ひとことで言えば，先入観を捨てた。医学書に限れば，公共図書館では軽いものしか必要ないと思いこんでいた。弊社在庫の裾野を広げ，医学系出版社との情報交換会をスタートし，全国 11 ヵ所で開催される「図書館ブックフェア」で医学書展示や講演会を企画し，アピールした」という回答がなされた。

医学書の在庫，あるいは手に取って見られる現物選書の場，の確保による売上増であった。

Ⅶ まとめ

本研究で明らかになったのは，1）図書形態に限れば医学専門書の『週刊新刊全点案内』の掲載率はほぼ 100％である。よって掲載・非掲載を家庭医学書中心の蔵書構成の一因とするのは困難である，2）TRC により選書ツールへの医学専門書の全点掲載だけでなく，現物選書を可能にする環境整備も行われている，以上である。

最後に本研究にご協力いただいた関係者各位に深く感謝を申し上げたい。

---

1 特集医学書市場の最新動向．出版月報．vol.57, no. 7, p. 4-11.

2 西河内靖泰，石井保志．患者当事者の利用に耐える健康・医療情報サービス構築への提言 ：公共図書館を例として．国際教養学部紀要．2016, no. 3, p. 35-45.

3 松本直樹，池谷のぞみ，桂まに子．"公立図書館における医学薬学分野の選書分析". 2017 年度日本図書館情報学会春季研究集会発表論集．日本図書館情報学会事務局, 2017, p. 9-12.

4 市川美智子，坪内政義． 地域公共図書館との連携による健康支援事業．医学図書館．2007, vol. 54, no. 3, p. 253-259.

5 木下朋美，中園長新．『週刊新刊全点案内』における新刊書籍の掲載状況．出版研究．2012, no. 42, p. 23-45.

6 図書館に会いにゆく，出版界をつなぐ人々．第 19 回（番外編）図書館流通センター・仕入部．図書新聞．2016 年 3 月 19 日, no. 3247, p. 7.

7 高橋安澄．TRC MARC の構築：図書館と利用者のための書誌データベースを目指して．情報管理．2017, vol. 59, no. 11, p. 732-742.

8 森岡浩．「BOOK」データベースの起死回生．情報管理．2016, vol. 59, no. 7, p. 457-464.